

人間の経済

第61号

目次

フランス・メッツでの個展報告

白川 昌生

『誰でもわかる地域通貨』韓国語版への序、日本語版

森野 栄一

自己完結度の高い地域経済をもつ自立した諸地域からなる日本を！

フランス・メッツでの 個展報告

白川 昌生

9月20日から28日までの一週間近く、私はフランス東部のロレーヌ地方にあるメッツという町へ展覧会のために出かけた。27日がオープニングになるため、現地で作品設置にあたった。すでにゲゼル研究会のサイトには私の展覧会の案内を出しておいたので、地域通貨の関係者の一部には情報は伝わっていたと思う。

はじめに結果報告をしておけば、地域通貨をからめた展示、活動はできなかつたことを述べておこう。フランスについて21日から町の中心部近くにある展覧会場——約300㎡の広さ——で、展示の作業、打ち合わせをはじめた。出発前よりフランスの地域通貨関係者とも連絡をとりたいことや、展示の一部にその問題を取り入れることを私から提案していたが、この件について主催者側（フォー・ムーブメント *Faux-mouvement*）から返事はこなかった。

私が今回、個展をすることになった現代アートセンター（日本では存在していないタイプのセンター）の活動について説明しておこう。フランスでは70年代の終わり頃から——特にミッテラン政権になってから明確な方向性と活動が展開したのだが——、フ

ランス各地で現代アートセンターという非営利、自主的活動がはじまった。パリにはすでにポンピドゥーセンターがあり、世界の芸術活動の情報を集積、分類、配信するインターナショナル・システムが動いていた。しかし、ドイツにおけるクンスト・ハーレ的な施設と場はフランスには存在しておらず、この点、フランスの地方における現代アートの活動へのサポート体制はドイツよりも大きく遅れをとっていたのである。ドイツのクンスト・ハーレはミュージウムとはちがい、自らのコレクションを持たない、展示活動を中心にした設備とドイツ各地を結びつけるシステムである。フランスもドイツのクンスト・ハーレのシステムを取り入れることで、各地の芸術的活動をパリ中心主義から分離させ独自の道と方法を発展させてゆく可能性を手に入れたのである。現在はフランスの主要都市にはアートセンターが存在している。活動の中心者たちはその地域出身の作家、美術史家、研究者、教師などさまざまな職種にわたるが、基本的には現代アートに興味を持っている有志から構成されている自主的団体である。地方の文化省や自治体から補助金をえて、空間を安く借り受けて活動が行われている。完全なアソシエーション体制というわけではないが、ドイツのクンスト・ハーレが基本的にドイツ作家連合を基礎として1900年代より運動がはじまったように、フランスにおいても文化省、美術学校、大学などの横のつながりを

基礎にこの動きは展開されている。

特にフランスのボルドーでは、ひとりの高校教員の現代アートへの熱狂的な啓蒙活動からは、やがてボルドー現代アートセンターという実体に——ボルドー市の所有する古い倉庫(三階建て)——結実化することになり、この成果がフランス内外において高く評価されると同時に、フランス内部での、地域の芸術活動拠点の獲得と成立へ大きな一歩をしるすことになったのである。80年代のはじめ頃より、こうした動きが盛んになり、フランスの現代アート全体の動き、水準のレベルを活性化させることになる。

このような現代アートの活動がフランスの内部で上昇し、若い世代の登場がみられたことは、フランスのみならずイギリスにおいても見られる現象である。イギリスも70年代終わりにはロンドンにICA(国際アートセンター)を設立し、独自の活動に入っていく。これらの動きは、ヨーロッパにおける新左翼の運動とも交差、対立、分離等々しながら発展し今日まで至っている。70年代のアメリカ経済とアメリカ美術のヨーロッパ制覇をうけて、批判的かつ独自の方向を探求する姿勢が具体的な体制、活動を生み出したのだといえよう。

私が個展を行ったメッツの現代アートセンターもこうした流れの中で生まれ、自らの場所と動きを80年代の終わりからはじめたのである。パリ周辺、近郊の町々にも五カ所くらいの現代アートセンターが存在しており、

国内外の作家が発表を行っている。これらのアートセンターは小規模ながらコレクションもはじめている。

私はメッツの関係者と直接、地域通貨について話をしたが、十分な情報は彼らには入っておらず、今回は地域通貨を会場で使用するのは難しいと判断した。そこで絵ハガキの作品についてのみだが、銀座の画廊で行ったように低価格で販売し、同時に証明書へのサインと展示の承諾へと変更した。これはすぐに理解された。展示場への入り口に、59枚のボタンつきの絵ハガキがつるされ、二枚一組で販売——1組4ユーロ(約600円)——されたが、初日に52枚が売れてしまった。これらの絵ハガキと証明書の作品は、今年12月に北九州市立美術館で行われる「美術と経済」というテーマのビエンナーレに、私は展示する予定でいる。

メッツでの個展会場では、私は200cm×250cmの写真と刺繍された音符の作品や200cm×250cmのカラー刺繍の作品、また大版の白黒写真110×180cm、3点と8号の作品12点によるインスタレーション、また150×150cmの木枠にブルーのネオン管をとりつけ、床に20個の水の入ったコップで構成されたインスタレーション、また200cm×250cmの古い葦簀を切り抜いて作られたゼロ戦などが展示された。会場全体を通じて、私は、私の両親の世代の、私の兄弟らの世代、私の世代、さらに

私の弟、妹の世代——ちなみに私は現在50代であるが——の記憶を重層的に表現しようとした。

一般的にメディアが取り扱うメジャーな美術の分野では、日本のアニメ、マンガなどが日本の江戸文化の流れとも組み合わせられた「ニュー・ジャポニズム」として欧米で紹介されてきている。私はマスメディアに浮かび上がってきているイメージではなく、むしろ日常生活と重層化した世代関係の中で体験されてきたイメージをある幻想の女性「サチコ」をつくり出して表現しようとした。具体的には、私が個人的に知り合った前橋のある御夫婦をキッカケにしている。奥さんは65歳ぐらいの人で、前橋のある洋服地屋にデザイナーとしてつとめ、2年前に亡くなった人である。この御夫婦とは7年前に知り合い、生活の上でも助けていただき、同時にいろいろと群馬前橋の町、人の歴史の話も聞かせていただいた。今回、私は「サチコの夢」というタイトルで作品を発表している。絵ハガキの作品も、これとリンクさせようと考えていたのだが、どうにも群馬前橋の絵ハガキを十分にあつめる時間がなく間に合わなくなってしまったので、絵ハガキ作品は別枠で、会場入り口にさりげなくおくことになったのである。

地域通貨のテーマとは大きく離れてしまった内容の文になり、はなはだ心苦しいのであるが、メッツの美術関係者は川野英二氏が「人間の経済」55号で発表されているSEL、RER

Sも知らなかった。私自身出発前に雑用におわれて、川野氏とも細かな連絡を取り合わなかったこともあって、地域通貨については、今回、なにも収穫がなかったことを告白しなければならぬ。ただ12月の北九州市立美術館での展覧会では、インターネットに接続したコンピューター・モニターもおけるので、ぜひMAAS、ゲゼル研究会、WATSYSTEMSへのアクセスを一般の人々へアピールしたいと思っている。

さらにフランスでの展覧会は、3月にはアルザス近郊のベルフォールという町の美術館へ巡回していくことになっている。その後はもうひとつ町をまわる計画でいるので、ゆっくり時間をかけてフランスの地域通貨活動の人たちともコンタクトを取ってみたいと考えている。

12月すぎには、また北九州美術館での報告を書くつもりでいる。

* 「サチコの夢」が、フォームーヴメントのホームページに出ていて展覧会の画像が見れます。
www.faux-mouvement.com
です。

『誰でもわかる地域通貨』韓国語版への序、日本語版

森野 栄一

本書が日本で刊行されたのは2年前であるが、いま地域通貨はブームの様相を呈している。日本は長引くデフレ不況のなかにあり、各地で社会や経済は疲弊しており、地域通貨には福祉、環境、町づくり、地域振興とさまざまなニーズに応じてくれるのではないかと期待が込められている。地域社会は各種のボランティアを必要としているが、ボランティアという無償の行為では息切れする。気持ちのこもったボランティアにカネを払うのは失礼だが、これに対する地域通貨という返礼のかたちが有効ではないか、また、どの自治体も国と同様、財政を傷めており、公共領域での住民の自発的な力の発揮を期待している、そうした行為に地域通貨で報いていくのはどうか、と。さらには、地域通貨は地域限定の支払手段なので、国民通貨と併用すると国民通貨を地域で循環させることになり、地域振興に役立ち、循環型の地域経済を形成していくツールになるのではないかと。まことに期待は多様である。しかしまだ始まったばかりの地域通貨は、どの地域でも、地域社会に信頼のネットワークを形成し始めた段階といってよい。これが今後どのように展開していくのか、その成否は別にして人の関わりとそのコミュニケーションのあり方を考え直すきっかけになっているように見える。

地域通貨の基本的な性格は、まず、国民通貨が介在する関係では出てきにくいニーズやこれにマッチする能力、財などが交換されることで、人との連帯やコミュニケーションがもたらされるところにある。つまりオルタナティブな通貨が国民通貨の世界では対立し競合するなかで孤立しがちな人間に社会的紐帯を取り戻させるわけだ。最近顕著な地域社会の崩壊状態を再建するには人々の連帯や信頼に基づく非公式な社会的コントロールが必要であることが地域通貨への関心の高まりのなかで意識されているとあってよいかもしれない。それは人々の自発的な行為を引きだし、一方向のボランティアではなく、他者のボランティアによって「報酬」を受ける同等者間の相互的な関係を与えることになる。また、地域通貨に媒介される関係では、同等者同士の相対取引によって多様な評価価値が出現することで、価値の多数性、それぞれの価値の還元不可能性が自覚されもする。国民通貨によって一元化され、評価を受けてきた価値はその個性を抽象されずに、具体的な関わりの中に出現することになる。地域通貨への参加者はいろいろな観点から自己が評価される体験をすることになる。人とその貢献は金銭次元での評価に切り縮められるのではなく、実質的な評

価値を受けることになるわけだ。地域通貨は仲間を作って運営され、その仕組みにはさまざまだが、どのシステムでも、会員になることで、人はじぶんに固有な尊厳をそこで確認し、そのことを通じて地域通貨というシステムをもつコミュニティへの統合を果たしていく。そのなかで人はおのが個性の発揮を通して協同社会を再領有していく可能性を実感していくことになる。

地域通貨はいつでも、だれでも、自由にはじめることができる。これは社会の共通領域へと人が積極的に関与しやすいことを意味している。地域通貨という協同した模索のプロセスがさまざまに着手されるのだ。地域には各種の地域通貨の取組が叢生していくことだろう。この事実は会員制で運営される地域通貨に不可避な排他性の問題点が、多数のシステムの併存のなかで解決されていくことでもある。地域通貨が発展していくとすると、地域社会はその内部に個性的ないくつもの地域通貨のシステムを抱えることになるので、自らを多元的、多中心的に構成していくことになるはずだ。

国民通貨は、いつでも、どこでも、何に対しても、また誰に対しても使える。同時に匿名性を特徴とし、カネの切れ目が縁の切れ目というように信用はカネ止まりの人間関係を与える。いわば人の信用という、その人が他者との関係で作り上げている実質が金銭次元に切り縮められていることを意味している。国民通貨は人々を連帯させるよりも敵対させ、競合させるのに適している。しかし地域通貨で問題になるのは人の実質的信用である。国民通貨が間に入る関係では人はカネだけをみていれば足りる。信用はカネが表現しているからだ。モノを売る商店主にとって買い手が何者であるかはどうでもよいことである。買い手の情報はたかだか販売戦略をたてるうえで必要になるだけであろう。ところが地域通貨は個人に関する多くの情報を運ぶ。相手がどのような人間であるかが常に問題となる。ここで人はこれまでと違ったコミュニケーションが成り立つことを知る。貨幣は社会において人々の間の請求権と支払義務が処理される誰もが同意する方法である。しかしこれは一種類である必要はない。その違いによって異なる人間関係とコミュニケーションが成り立つことを地域通貨が示し始めている。

かつて貴国の哲学者、李星湖は『錢害』において、「人の言に曰く、錢は妖物たり、それ虚費、民の貧乏なる所以なり」といったという。もちろん、貨幣が不要なわけではない。しかし、虚費に苦しめられない仕組みによって補完されなければほんとうに豊かで、健全で、気持ちのよい社会は不可能であろう。本書が貴国の風土と人情のなかで地域通貨が消化される一助になれば幸いである。地域通貨は住民のイニシアティブでつねに動いており、変化も激しいものである。韓国語版では、この序を追加したことにくわえ、日本語版刊行以後の最新情報に差し替える変更を加えた。

最後に、翻訳という労苦の多い仕事を果たされた全定根氏に深く感謝したい。

2003年10月1日

人間の経済

第61号

目次

フランス・メッツでの個展報告

白川 昌生

『誰でもわかる地域通貨』韓国語版への序、日本語版

森野 栄一

2003年10月12日発行 第61号

編集・発行 社会福祉学研究会

〒211-0021 神奈川県藤沢市神奈川区安土町3-31 森野栄一村

電話 045-441-0407 ファックス 045-441-0438

e-mail to : info@grj.org

www.grj.org

<雑誌の購読を希望する方へ>

Copyright © 2001-2003 Geosocial Research Society Japan
日本は自らを築き上げた自立した地域からなる日本を！

「日本」情報 > 新刊雑誌「全日本」の果敢な歩みと今後の展望
HIRORI # 005

個展報告

白川 昌生

9月20日から28日までの一週
間近く、私はフランス東部のロレーヌ
地方にあるメッツという町へ展覧会
のために出かけた。27日がオープニ
ングになるため、現地で作品設置にあ
たった。すでにゲゼル研究会のサイト
には私の展覧会の案内を記しておい
たので、地域通貨の関係者の一部には
情報は伝わっていたと思う。

はじめに結果報告をしておけば、地
域通貨をからめた展示、活動はできな
かったことを述べておこう。フランス
についての21日から町の中心部近く
にある展覧会場——約300㎡の広
さ——で、展示の作業、打ち合わせを
はじめた。出発前よりフランスの地域
通貨関係者とも連絡をとりたいこと
や、展示の一部にその問題を取り入
れることを私から提案していたが、この
件について主催者側（フォー・ムーブ
メント Faux-mouvement）から返事
はこなかった。

私が今、フランスで活動している
現代アートセンター（日本では存在し
ていないタイプのセンター）の活動に
ついて説明しておこう。フランスでは
70年代の終わり頃から——
ヴァテラン政権になってから明確な方
向性と活動が展開したのだが——、フ

いう非営利、自主的活動がはじまった。
パリにはすでにボンビドーセンター
があり、世界の芸術活動の情報を集
積、分類、配信するインターナショ
ナル・システムが動いていた。しかし、
ドイツにおけるクンスト・ハーレ的な
施設と場はフランスには存在してお
らず、この点、フランスの地方におけ
る現代アートの活動へのサポート体
制はドイツよりも大きく差をとり
ていたのである。ドイツのクンスト・
ハーレはデュッセルドルフとほちがひ、自ら
のコレクションを持たない、展示活動
を中心とした美術館とドイツ各地を結
びつけるシステムである。フランスも
ドイツのクンスト・ハーレのシステム
を取り入れることで、各地の芸術的活
動をパリ中心主義から分離させ独自
の道と方法を開発させてゆく可能性
を手に入れたのである。現在は、フ
ランスの主要都市にはアートセンターが
存在している。活動の中心者となる
の地域出身の作家、美術史家、研究者、
教師などさまざまな職種にわたるが、
基本的には現代アートに興味を持っ

2002年10月12日発行 第61号

編集・発行 ゲゼル研究会

221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野気付

電話 045-441-0407 ファックス 045-441-0428

e-mail to : info@grsj.org

www.grsj.org

<無断転載複写を禁ず>

Copyright © 2001-2002 Gesell Research Society Japan